

今月の1冊

『不登校・ひきこもりの9割は治せる』

1万人を立ち直らせてきた3つのステップ』

杉浦孝宣／著

光文社新書 二〇一九年 八〇〇円＋税

本書は書名にあるように、「1万人を立ち直らせてきた」体験から編み出された「3つのステップ」をもとに、「9割の不登校・ひきこもりを治した」実践記録です。著者は自身の不登校克服経験をベースに、中卒浪人生のための学習塾・学会を設立。以来、三〇年以上、不登校等の支援活動を行ってきただけに、数々の提言は説得力に富んでいます。

著者が一貫して主張するのは、不登校への「はたらきかけ」の重要性です。「放っておいてよいわけがありません」「時期が過ぎると手遅れになってしまう」と熱く綴ります。その舌

鋒はスクールカウンセラーに向けられ、「無理に登校させないで、子どものやりたいようにしておきなさい」との助言を、「聞くだけ」「受容して肯定するだけ」と一刀両断にします。

この指摘には、学校関係者も真摯に耳を傾けなければなりません。不登校の対応に悩む教師が、文部科学省の不登校関連通知にある

「不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つ」と、「『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく」の二文を、もっけの幸いとばかりに「休養を与えるため、登校を促すはたらきかけは一切しない」としてしまわないか懸念されます。

本書の眼目は、著者が三〇年以上の試行錯誤の末にたどり着いた、「規則正しい生活をし、自信を持ち自律し、社会に貢献する」という「3つのステップ」への理解を深めることにあります。「両親等が一枚岩となって子どもと向き合う」や、「歳の近い第三者が不登校やひきこもりの子どもと親の間に入って信頼関係を築きながら」進めるという留意点も参考になります。

「3つのステップ」の順序性についての指摘も重要です。「夜寝て朝起きる(略)といったごく当たり前のこと」。これを出発点に「毎日どこかへ通わなければならない状況を作る(略)フリースクール、保健室、適応指導教室など、どんなところでも構いません」と続きます。

次の「自律」のステップでは同世代との交流や役割体験が、「社会貢献」では生活改善合宿やボランティア活動が推奨されます。事例からは、自己肯定感や自己有用感が獲得されている様子がよくわかります。

不登校児童生徒への支援策の立案・実施には、背景・態様・時期等を十分検討する必要があります。もちろん「休養」への理解も。「それにつけても休養とは」。読後の独語です。



神田外語大学客員教授 嶋崎政男